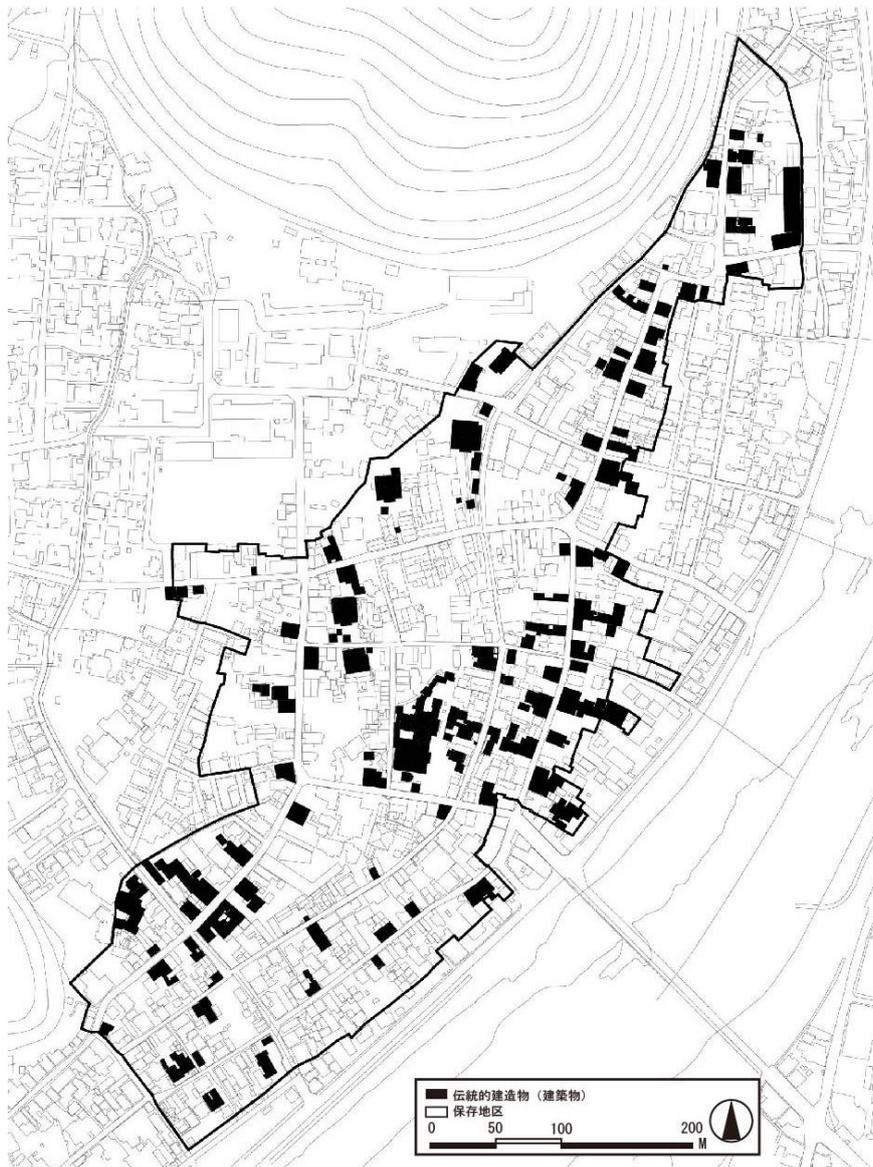




【写真1】現役のしょうゆ蔵（右）が建つ町並み



【写真2】通り沿いに軒の低い町家が連なる
(写真1, 写真2 共に提供はたつの市)



たつの市龍野伝統的建造物群保存地区の範囲

【新規2】地形を巧みに活かして形成された、鹿児島藩の武家地。生垣が水路に映える。

みなみ し か せ だ ふもと
南さつま市加世田麓伝統的建造物群保存地区

所在地 鹿児島県南さつま市大字加世田武田字下鴻巣，字尼ヶ城，字社附及び字柿本小路の全域並びに加世田本町，加世田麓町，大字加世田武田字城のやま，字上鴻巣，字竹田神社山，字梶畠ヶ，字八反堀，字下上鴻巣，字下なかぐるす，字山下小路及び字越ヶ迫の各一部

面積 約20.0ヘクタール

選定基準 (二) 伝統的建造物群及び地割ちわりがよく旧態を保持しているもの

南さつま市は、薩摩半島の南西端に位置し、加世田麓は、市域の北部、加世田川西岸の独立丘陵と台地に挟まれた南北に細長い平たん地に位置する。江戸時代、鹿児島藩は領内に外城と呼ぶ行政区画を設けて統治し、外城には家臣団の居住域である麓に、地頭仮屋と称する行政庁を置いた。12世紀後期に別府氏が加世田川西岸の独立丘陵に別府城を築いたが、15世紀中期以降は島津家が加世田を領有し、江戸時代には加世田も外城の一つとなった。別府城の周辺に広がりをもせていた武家地は、18世紀中頃に益山用水が開削されるなど、この頃、地割が整備されたと考えられる。近代以降も南薩地域の政治経済の拠点として発展するが、市街地の中心は麓の北方へと移り、旧武家地の地割は残された。

保存地区は、加世田麓のうち、加世田川西岸の区域とその南の竹田神社を含む範囲である。自然地形に沿って緩やかに曲がる大きな2本の街路と、台地裾野の湧水地から延びる水路に沿う数本の小路は、近世末期の旧態をよく留める。屋敷地の周囲には石垣と生垣を設け、敷地境から若干後退させて腕木門を開く。街路との間には庭を設けて、主屋をやや奥に配し、その周囲に附属屋を建てる。主屋は、入母屋造、平入、棧瓦葺、平屋建を基本とする。縁を介してザシキが庭に面する平面形式は、昭和初期になっても継承される。

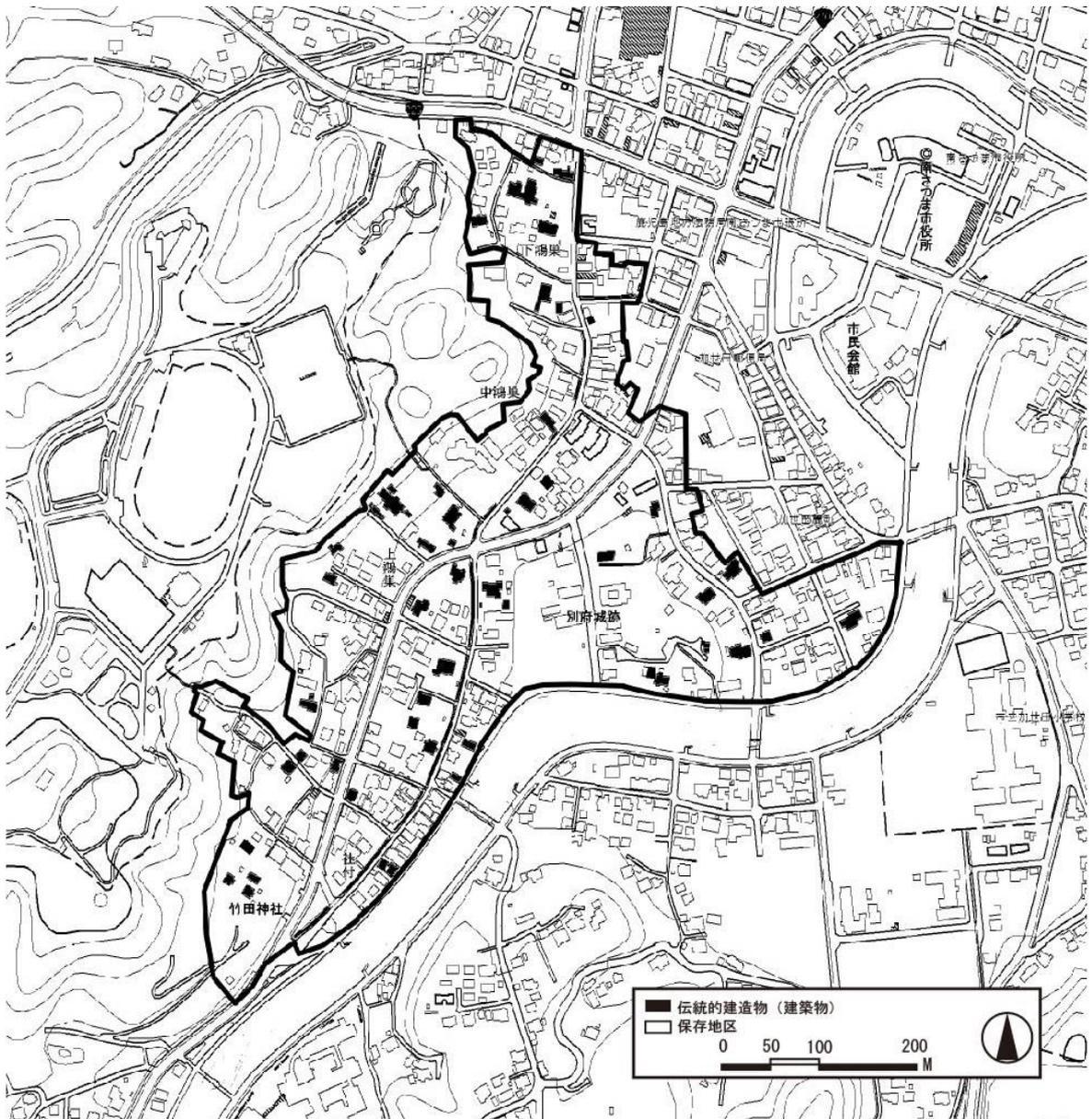
南さつま市加世田麓伝統的建造物群保存地区は、中世以来の山城周辺に形成された武家地を起源とする麓であり、自然地形に沿って曲線を描く街路や地割は近世以来の姿をよく留める。近世の武家住宅やその形式を引き継ぐ主屋をはじめ、益山用水とそこに架かる石橋、敷地を画する石垣や生垣、腕木門などとともに、地形を巧みに活かして形成された麓の独特な歴史的風致をよく伝えており、我が国にとって価値が高い。



【写真1】旧武家地を南北に貫流する益山用水



【写真2】街路沿いに石垣や生垣，腕木門が並ぶ
(写真1, 写真2 共に提供は南さつま市教育委員会)



南さつま市加世田麓伝統的建造物群保存地区の範囲